

みずみずしく大胆な活動

「川の日」ワークショップは、開かれた場で「何を“いい川”“いい川づくり”とするか」のやりとりを通して新しい価値を相互に発見し、川ごとの個別性、特殊性をつきぬける普遍的方向感を分かち合うことを目指している。

もちろん、それまでの蓄積を整理した“いい川”・“いい川づくり”の評価のものさしは、募集要項に記載しているが、明示された評価尺度のみにこだわるのではなく、公開、応答、評価を通して新しい評価のものさし、価値を発見しすくい上げるやり方を志向しているところに、そのオリジナリティがある。

7回を迎えた今年のそれも、新しい価値発見と目覚しい方法が提示された。グランプリと準グランプリを受賞したプロジェクトにそのことが如実に現れている。

最上川の活動は、川のゴミをなくすための地域独自の簡易調査法の開発、実践の成果が見事にマップ表現に結実している。そこには、地域でのオリジナリティな活動は、地球の反対側にメッセージが届くという「グローカリゼーション」（グローバルとローカルの統合）の検証を示すものであった。

御祓川では、川・まち・子どもをつなぐ活動が経営的にも黒字となり、その感動を歌に託すという「ミッション・ソロバン・エモーション」の三拍子そろった中身の濃い方法が提示された。

別当川・荷路夫川は、不思議な生きものへのセンス・オブ・ワンダーの感覚回路と驚くほど豊かに開かれた子ども達のワクワク・ドキドキが実感された。

日野川の子供達は、元祖「タンケン・ハッケン・ホットケン」の体験からさらに表現活動に高まっていることを示した。

白川の「三人娘」たちのイキ（生き）のよさは、次世代育みの動きとして耳目を引くものであった。

中正井の高校生たちの地域の記憶を蘇えらせる具体的な活動は、これからの農道再創造への切り口を鮮やかに示した。

札内川・帯広川にかかわる民間土建技術者たちの意気軒昂ぶりは、企業市民の協働の可能性を開示した。

これらに代表されるように、最終選考対象となった各川の活動状況は、みずみずしくも大胆な中身という点で共通性がある。そこには、基準や枠組みとは異質な何かが常に織り込まれ、一様なものとして均質化されることなく、関わる住民と行政、子どもと大人の間緊張をはらんだ対話と実践の場が、たゆまず瞬間的に切り開かれている。その成果の中身が公開の場で、相互応答評価を通して新たに発見され、深く、多様に意味づけされていくことによって、「和やかでメリハリのある充実したワークショップ」（参加者の感想）となっていく。来年は会場が東京から矢作川のある豊田に移るが、新しい質的发展のある場になることを心から願ってやみません。